

平成 29 年度地域づくり海外調査研究事業調査報告書
地域資源を活用した農村振興

調査地：ベルギー クリュペ

「ワロンの最も美しい村」協会

調査日：平成 29 年 10 月 11 日

平成 30 年 3 月

一般財団法人 地域活性化センター

振興部 地域支援総務課 長友 弥生

目次

1. 調査の目的	P1
(1)鹿児島市の現状	
(2)鹿児島市の課題	
2. 「世界で最も美しい村」連合とは	P3
(1)「世界で最も美しい村」について	
(2)「日本で最も美しい村」連合について	
3. 「ワロンの最も美しい村」協会について(調査内容)	P4
(1)Cruget 村内の視察	
(2)ヒアリング調査内容	
4. 鹿児島市で活かせること	P7
5. おわりに	P8

1. 調査の目的

(1) 鹿児島市の現状

鹿児島市は、鹿児島県本土のほぼ中央に位置し、人口約 60 万人の中核市である。桜島や錦江湾などに代表される豊かな自然環境を有する一方で、市中心部には天文館や鹿児島中央駅を核とする繁華街も広がり、南九州において大きな役割を担う市である。歴史的にも、19 世紀中ごろには島津斉彬を中心に反射炉や機械工場が作られ、これらの産業遺産群は 2015 年に「明治日本の産業革命遺産」として世界遺産にも認定されている。明治維新においては薩摩藩の西郷隆盛・大久保利通などが大いに活躍し、明治維新 150 周年を迎える 2018 年には西郷隆盛が NHK 大河ドラマに取り上げられるなど、観光資源も豊富である。

しかし、全国の多くの自治体同様に当市の人口は 2013 年の 607,604 人をピークに減少しており、2040 年には、519,563 人まで減少すると推計されている。

一方で、観光客数の推移を見てみると、平成 23 年の九州新幹線の全線開業などを受けて年々増加している。アジア圏にも近く、位置の優位性を活かした外国人観光客のさらなる誘客も今後期待される。

鹿児島市総合戦略の基本目標 3 としても「まちの魅力を『みがく』」と掲げられており、「誘客力の高さ」と「滞在満足度の高さ」を兼ね備えたまちの創造を目指しているところである。

(2) 鹿児島市の課題

旧鹿児島市は平成 16 年に周辺 5 町（吉田町、桜島町、喜入町、郡山町、松元町）と合併した。これらの合併した周辺 5 町は大部分が農村地域であり、市中心部の都会的な地域と農村地域の共生が課題となっていると考える。

行政所管区域をもとに市域は 9 つの区域に分けられるが、市中心部の 2 区域に市民の約 4 分の 3 が居住している。都市部の市街化区域には宅地が造成され、商業施設も豊富で交通の利便性も高いが、農村地域は高齢化が進み活力が減退している。

① 鹿児島市のグリーンツーリズムについて

地域資源を活用した農村振興を検討するにあたり、鹿児島市のグリーンツーリズムについて触れておきたい。

グリーンツーリズムとは、農山漁村地域において自然、文化、人々との交流を楽しむ余暇活動のことである。当市では、平成 16 年の市町村合併を契機に、都市住民や観光客のグリーンツーリズムに対するニーズに対応するとともに、農村地域の活性化を図るため、平成 18 年に「鹿児島市みどり豊かな農山村ふれあい推進基本計画」、平成 24 年に「鹿児島市グリーンツーリズム推進計画」、平成 29 年には「第 2 期鹿児島市グリーンツーリズム推進計画」を策定し、グリーンツーリズムを推進している。

「第 2 期鹿児島市グリーンツーリズム推進計画」では、「多彩な体験、あたたかい交流によ

る心身のリフレッシュと農村地域の活性化」を基本目標に掲げている。また、滞在型観光への取組促進や既存施設の活用などを通じた都市部住民の農村地域との交流促進、人材の育成と関係団体への支援・連携、農村地域の魅力の情報発信の三つを基本方針としている。

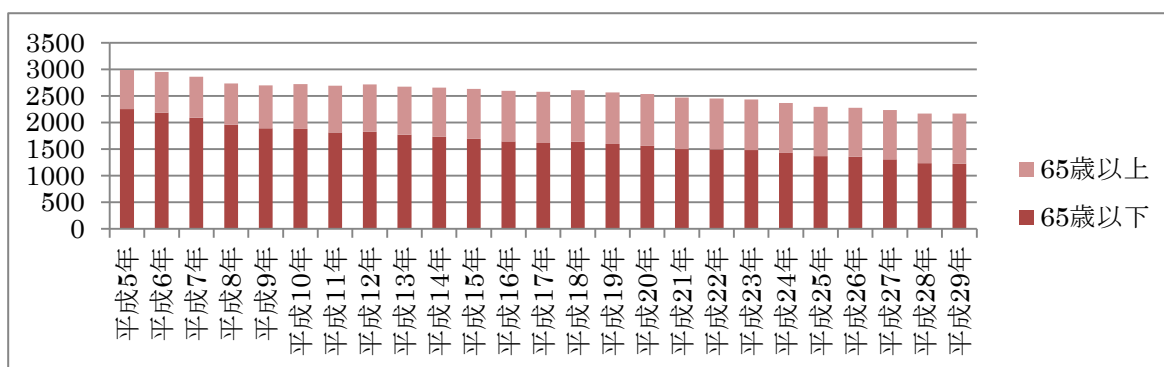
特に人材育成では、グリーンツーリズムインストラクターを養成するなどグリーンツーリズムを担う人材の育成や支援を行ったり、グリーンツーリズムを自主的・主体的に行っている団体等を「鹿児島市グリーンツーリズム登録団体等」として認証したりするなどの支援を行っている。

グリーンツーリズムの推進に向けて、全国各地で取り組まれているグリーンツーリズムの中でニーズの多様化にいかに対応するか、少子高齢化及び担い手不足の中で人材育成をいかに行っていくか、情報発信をいかに効果的に行っていくかなどが課題となっている。

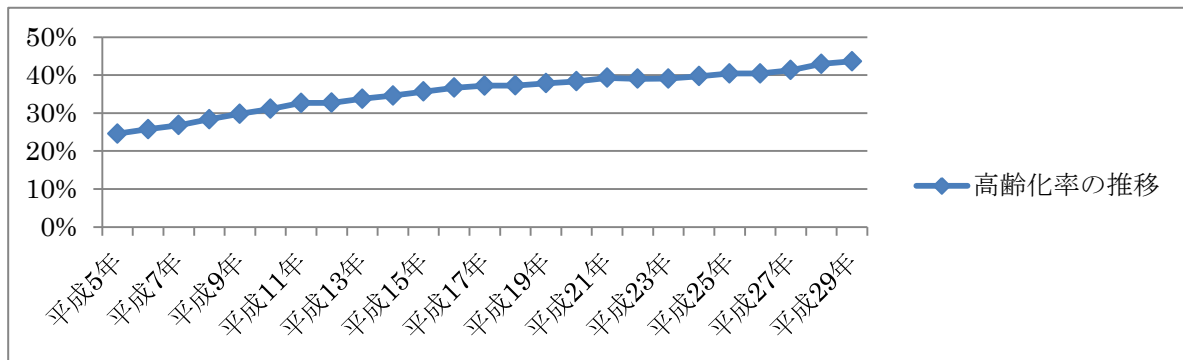
② 農村地域の具体的例から

筆者の出身地である鹿児島市内の犬迫町に当てはめて、農村地域について具体的に考えてみたい。犬迫町は、市中心部から北西に 15 キロほどの位置にある。町内には田畑が広がり、住民の多くが農業に従事している。農産物直売所には、都市部からわざわざ野菜を買いに来る人もいる。さらに、農産物直売所とその駐車場一帯が広場になっており、地域の祭りやイベントが催されることもある。冬には鬼火焚き、夏には六月灯など伝統的な行事も集落ごとに開催されている。また、町内には（公財）鹿児島市公園公社が管理する「鹿児島健康の森公園」や、市民農園のある「鹿児島市都市農業センター」がある。鹿児島健康の森公園には、体育館やテニスコート、プールなどがあり、学生から親子、高齢者まで多くの市民の憩いの場となっている。また、鹿児島市都市農業センターでは、定期的に「農林水産まつり」「畜産まつり」等が催されており、町内の道路が渋滞するほどの賑わいである。

犬迫町でも表 2 及び表 3 のとおり、20 年間で人口が約 500 人減少し、人口減少と高齢化が進んでいる。平成 29 年 10 月末日現在の人口 2,170 人のうち、947 人（約 43.6%）が 65 歳以上である。鹿児島市全体の高齢化率 24.8%と比べても、高齢化が進んでいる地域である。



【▲犬迫町の人口推移（筆者作成）】



【▲犬迫町の高齢化率推移（筆者作成）】

豊かな自然環境に恵まれている一方で、市街化調整区域であるため町外の人が町内に居住しにくく、加えてもともと町内に住んでいた若い世代の多くは、高校卒業や就職を機に町外や市外へ出て行ってしまう。一方で、犬迫町は市中心部から車で 20 分とアクセスが良く、都市農村交流の適地ではないかと考える。

当市にはこのような農村地域が多くあり、市中心部の観光地だけでなく、農村地域の地域資源を活かした取組により、より多様な観光メニューが提供可能となり、農村地域の活力づくりにつながるのではないかと考え、「地域資源を活用した農村振興」をテーマとして設定した。農村地域がより活性化するための手法を考察し、また、当市のグリーンツーリズムの取組における課題解決のため、ベルギーのクリュペにて「ワロンの最も美しい村」協会を調査した。

2. 「最も美しい村」連合とは

(1) 「世界で最も美しい村」について

「世界で最も美しい村」の取組は、1982 年にフランスから始まった。行き詰まりを見せた先進国の都市モデルから脱却するための運動として、小さくても美しい村々の景色や文化を保存することを目指して起こった。「世界で最も美しい村」の始まりであるこの「フランスで最も美しい村協会」に加盟するためには、最低 2 つ以上の歴史的遺産があること、村全体が美しさを持ち続けていること、村の人口は 2,000 人以下であること、連合に加盟するには村内の議会で同意が得られていることが必要である。また、5 年に 1 度再評価が実施される。

フランスから始まったこの取組は、イタリア、ベルギーに波及し、2003 年には「世界で最も美しい村連合会」が設立された。

(2) 「日本で最も美しい村」連合について

日本でも「日本で最も美しい村」連合が 2007 年に発足した。その発端となったのは、地方の過疎化及び人口流出、少子高齢化の進行が叫ばれる中で、市町村の財政基盤の充実強化、行政

の広域化による施設やサービスの効率化を目指して「市町村の合併の特例等に関する法律」が施行されたことである。当時 3,200 以上あった市町村は、これにより激減し、市町村合併により慣れ親しんだ地名が消えたり、合併市町村内の都市部と農村部の格差が広がったりするなどの状況が発生した。そのような中、現連合会長である元美幌町長の浜田哲氏により「失ったら二度と取り戻せない景観や文化がある」「小さくても素晴らしい地域資源を守りたい」という考えのもと、小さくても輝くオンリーワンを持つそれぞれの地域が美しい景観、環境及び文化をいつまでも守り育てていくことを目指して「日本で最も美しい村」連合が設立された。当初の加盟町村は 7 町村であったが、現在は 64 町村が加盟している。「世界で最も美しい村世界連合会」にも 2010 年に加盟した。

① 活動内容

- i. 「日本で最も美しい村」の名称・ロゴマークの使用、普及を図ること。ロゴマークを使用することが良好な地域づくりに役立つようブランド価値を高めること
- ii. 定期総会やフェスティバルの開催を通じて、連合に加入している自治体（地域）の自立・発展のために相互の経験や研究を共有すること
- iii. 加盟町村の経済的価値を高め、社会的発展を促すこと
- iv. フォトコンテストの開催や商品開発などで地域の魅力を発信し、交流人口の増加による地域経済を発展させること
- v. ホームページや雑誌などによる広報活動及びサポーター会員制度の拡充に努めること

②加盟条件

「日本で最も美しい村」連合には自治体もしくは地域で加盟することができる。

加盟の条件は、以下のとおりである。

- i. 直近の国勢調査の人口がおおむね一万人以下であること
- ii. 申請する自治体の合意を得ていること
- iii. 次に定める地域資源が 2 つ以上あること
景観：生活の営みにより作られた景観（伝統的なまちなみや里山など）
文化：昔ながらの祭りや芸能、郷土文化など
環境：豊かな資源や自然を生かした町や村の環境
- iv. その他、地域資源を活かす活動を住民が行っていること
- v. 地域会員の場合は、申請する地域に規約を有する地域協議会などの団体があること

3. 「ワロンの最も美しい村」協会について（調査内容）

「ワロンの最も美しい村」協会（Les Plus Beaux Villages de Wallonie:以下「協会」という。）の事務所がある Crupet という村は、人口 300 人ほどの村で、ベルギーのワロン地方の都

市 Namur から 20km ほど南東に位置している。協会事務局の Francois Delfosse 氏と、村で地域活動を行っている Croline Verhoeff 氏に村内を案内していただいたのち、協会の事務所でヒアリングを行った。

(1) Crupet 村内の視察

Crupet 村は移住先として人気があり、現在空き家は一軒もないとのことだった。人気の理由としては、協会が美しい村のプロモーションを行っているという面もあるが、世界的な認証を受けているというイメージが大きいという。他国の美しい村に興味のある人やワロン地域の他の村に興味のある人がやってくるそうだ。小さな村でありながら 4 つ星を誇るホテルがあり、村内には地域の食材を使ったレストランが 4 つある。

以下、村内で案内していただいた場所である。

① 聖アントワーンの洞窟

アントワーンという聖人を祀った洞窟であり、20 世紀初頭に村民が協力して作った。畑を耕しやすくするため、畑から取り出した大きな石を積み重ねて作ったものだという。洞窟の中には聖アントワーンの紹介をするモニュメントがあり、今でもミサを開催したりすることがある。村内の人にも地域の歴史を知ってもらうことが重要で、歴史を知ることによって地域への誇りを醸成する効果があるとのことだった。



【▲聖アントワーンの洞窟】

② 教会

この地域はすべて教会(カトリック)を中心に村々が成り立っており、昔は教会が権力の象徴であり、人々のよりどころであった。現在でも教会の掃除などは住民が自発的に行っているという。



【▲教会】

③ ハイキングコース

Verhoeff 氏をはじめとする地域のボランティアグループが周辺の 7 つの地域と連携して 10 km のハイキングコースを 10 コース作成し、案内板を設置しているという。行政から助成金を受けて、このような地域活動を行っているとのことだ。住民サイドから村を観光地化するために行政へ提案をしたとのことで、このような住民の活動についても協会が手伝いをしたりするという。しかし、Verhoeff 氏のように地域活動を積極的に行っている人々が高齢化しているとのことで、地域活動の担い手確保についてはこの地域でも課題となっている。



【▲ハイキングコースの案内板】

④ 祈りの場

農作業をする人々が、安全や豊作を祈って毎日祈りに訪れていた場所だという。最近はこの祈りの文化がなくなりつつあり、村のボランティアグループが、チャペルを残すために建物を改修したり、古くなったチャペル内の像の色を塗り直したりする活動をしているという。

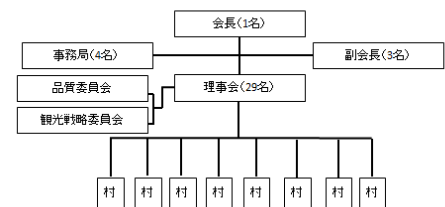


【▲祈りの場】

(2) ヒアリング調査内容

① 組織体制

協会では、事務局として事務局長（常勤）、観光プロジェクトマネージャー（常勤）、建築家（パートタイム）、会計士（パートタイム）の 4 名が働いている。それ以外に会長、副会長、理事がおり、現在美しい村として、ワロン地方の村が 30 村加盟している。



【▲ワロンで最も美しい村協会の組織体制(筆者作成)】

協会の運営資金は、行政からの助成金などが 60%、村からの会費が 20%、自己財源（製品販売、旅行プランニング、コンサルタント的業務等）が 20%である。

② 加盟基準

入会するためには、「その村に往復 2 時間かけて行きたいほど魅力的な村かどうか」が判断基準となる。まちの質として風景、公共施設、建築物と建築遺産、歴史的な建築と現代的な建築の融合性、また、観光の質として観光サービス、イベント、アトラクション、地域特産物、また、地元の支援が評価対象になるとのことであった。村の加盟には大学教授や建築家などからなる品質委員会が建築物の審査を行い、観光業者からなる観光戦略委員会がホテルやレストランなどの観光客の受け入れ態勢の審査を行い総合的に判断される。また、5 年ごとに再審査を受けることが地域で継続的な活動を引き出すとのことだった。

③ 活動内容

加盟した村は、協会のロゴマークを村内に掲げることができる。協会では加盟した村の写真を掲載したガイドブックを作成したり、ホームページなどで村を紹介するなどのプロモーション活動を行っている。

また、旅行のプランニングや特産品開発、村づくりへのコンサルタント的業務も行っている。

村内の視察の中で Delfosse 氏が「住民と一緒に古い建物を修理したりすることもあるし、イベントを開催することもある。一方で、住民の



やりたいことを行政へ伝えることもある。住民と行政を繋ぐような役割だ」
話していたのが印象的であった。

【▲ワロンの最も美しい村

協会のロゴマーク】

④ 今後の課題

今後の協会の課題について聞いたところ以下のような内容であった。

まずは、観光客数の統計が整備されていないことである。協会に加盟すると、最初の年に 30%訪問者が増え、その後は 15%から 20%の安定した訪問者増があるそうだが、村が解放されているため、正確な人数を把握できていないという。

次に、地元のホテルやレストランの大部分がヨーロッパ以外の企業のインターネットサービスにより予約されていることである。協会のホームページや、地域団体のホームページで予約できるようにすることと、情報発信のツールを増やすことが課題だという。

Crupet 村に関しては、まず特産品が少ないことが挙げられた。Crupet 村は 19 世紀に製塩や製紙、ビールなどで栄えた歴史があり、近くの小さな村々と連携して、多数の地ビールと一緒にケースに入れて売ることを検討しているという。

次に、担い手不足である。協会の規定では地域での継続的な活動が加盟の条件となっているが、Crupet 村で地域活動を行っている Verhoeff 氏のような人は現在 8 人しかいないとのことであった。地域の歴史を地域内の人に知ってもらうことで地域への誇りを醸成し、地域課題を地域内で共有するようにしているそうだ。

最後に、行政を含む関係団体や周辺の小さな村との連携のさらなる強化である。特に周辺の小さな村とは一緒にプロジェクトに取り組むなどお互いに顧客を紹介しあえるような関係をより強めていく必要があると感じているという。

4. 鹿児島市で活かせること

以上の Crupet 村での視察及びヒアリング調査を踏まえ、当市の農村振興の取組みの中で以下の点を活かしたい。

① 地域の歴史や地域課題を地域住民と共有する

村の歴史を知ることが住民の地域への愛着を育てるという話が繰り返しあった。また、地域で問題となっていることを住民と共有し、地域の問題を自分事としてとらえる人を増やしていく必要があるという話もあった。

そのためには、地域の歴史を皆で学ぶ場を作ったり、地域でワークショップを開催したりして自分たちの地域の課題を知ることが必要であると感じた。

② 他の地域と連携した農村体験コースの整備

視察の中で、小さな村同士が横に繋がり連携する必要性についてのお話があり、当市でも、農村地域を巡り、さまざまな農村体験をするツアーを開催するなどが考えられる。

③ 住民と行政をつなぐ人材や団体の必要性

Francois 氏の「協会は住民と行政を繋ぐ立場である」というお話から、当市でも住民と行政、その他関係団体をつなぐ人材や団体が必要である。前述したグリーンツーリズムインストラクターの育成やグリーンツーリズム登録団体の増加を促進することとあわせて、既存の地域コミュニティ協議会等との連携を強化していく必要がある。

④ 有名な観光地だけでなく農村地域へも観光客が向かうような効果的な PR を行う

農村地域の豊かさを表現するような風景・祭りなどの写真を HP に掲載したり、人が多く訪れる都市部の観光地に農村体験の案内パンフレットを置いたりするなどして興味を持ってもらうような PR をしていくことが必要である。

5. おわりに

当市の農村地域は、現状ではまだ魅力を活かしきれていないが、農村地域の持つ可能性は極めて大きいと考える。農村地域の魅力を発掘し磨き上げることで、観光客の多様なニーズに対応することが可能となり、農村地域の交流人口の増加により活気を生み出すことができると考える。私もその一助となるよう行政職員及び一市民として地域づくりに取り組んでいきたい。

＝謝辞＝

今回の調査では、「ワロンの最も美しい村」協会事務局の Francois Delfosse 氏、村のボランティアグループの Caroline Verhoeff 氏に時間をかけて村を案内していただきました。

また、今回このような貴重な学びの機会をいただいた（一財）地域活性化センターと派遣元である鹿児島市にもこの場を借りて感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



＝参考文献等＝

- ・『ベルギーの最も美しい村全踏破の旅』（2016/講談社/吉村和敏）
- ・『日本で最も美しい村 2』（2015/講談社/ハースト婦人画報社編）
- ・『鹿児島市まちひとしごと創生人口ビジョン』『鹿児島市まちひとしごと創生総合戦略』

(<https://www.city.kagoshima.lg.jp/kikakuzaisei/kikaku/sousei/keikaku.html>)

- ・『第 2 期鹿児島市グリーンツーリズム推進計画』(2017)

(<http://kago-greent.jp/system/wp-content/uploads/2017/05/79babe9933bf006f099af4a129ea462a.pdf>)

- ・『Les Plus Beaux Villages de Wallonie Toeristische gids』(2017/Les Plus Beaux Villages de Wallonie)